

博多老舗ものがたり

「株式会社中村タイル商会」篇（中編） ◎お聞きした方：代表取締役 中村正昭さん

創業明治四十五年、一〇〇年以上の歴史を誇る中村タイル商会。大正ロマン時代の幕開けに乘じ、タイル販売業は順風満帆な船出をし、創業者・中村正次郎の事業は町の人々からも温かく受け入れられた。多くの弟子を住み込みで働かせていた正次郎だが、大きな悩みの種が一つだけあった。それは何だろうか？前回に引き続き、現・四代目社長中村正昭さんに聞いた。

多くの弟子を取り、事業が円満に推移してた正次郎にとって、最も大きな悩みは子どもに恵まれなかつたことでした。計画的に後継者を育成したいと考えていたようですが、子どもができず、寂しい想いをしたようです。妻の弟である英男を養子に迎えて、彼が二代目社長となるのですが、実はこの二代目も子に恵まれなかつたんです。一〇〇年の歴史のなかで、実は実子が代を継いだのは私が初めて。「子に恵



まれずに、後継者選びに苦労した」というのが、創業者と二代目の共通の悩みだったようですね。

とはいっても、二代目の時代は戦後の高度経済成長期真っ只中。その前、正次郎の時代には戦災で本社社屋も書類も何もかもなくした当社でしたが、幸い熱に強いタイルそのものは戦火の中でも残りました。焼野原に埋もれていたタイルを掘り起こし、綺麗に洗うと、調達庁（編注・米軍の物資などを所管した機関）を通じて業者が大いに買ってくれるのです。そうして戦後復興していきました。それがひと段落し、二代目・英男の時代になると今度は、人々の生活様式が一変します。バス付、タイル張りシステムキッチンを持つ公団団地の人気が急騰し、郊外には洋風のマイホームを持つ人までも。まさにタイルの需要が一気に増え始めたのです。景気がいいだけに特に英男は後継者がいないことを不安に思つたことでしょう。結局昭和四十四年に、株式会社化したのですが、このとき縁戚であった私の父・博幸を将来の三代目候補として役員に加えました。父は建築畑出身ではなく、当時公務員だったので転職には非常に勇気が要つたと思いますね。だいぶ葛藤したのではないでしようか。しかし能力を請われて入社し、昭和五十三年には三代目に就任しました。三代目の時代にはバブルを経験し、業績的には最高売り上げを達成しています。

（続く）



■株式会社 中村タイル商会
住 早良区有田7・24・6
☎ 092・852・7328